教員だけでなく学生の参加を求めた双方向性型のFD
テーマ:授業評価

＜step 1＞　平成22年11月24日、25日、30日

- 学生と教員で懇談し、1学年の教育について意見・要望等を収集（4グループに分ける（人文系、語学系、自然科学系1（生物）、自然科学系2（物理化学系）

＜step 2＞　平成22年12月7日

- Step 1の報告と討論

教養教育・一般教育とは

教養教育：

- 中世の大学に始まるLiberal Artsの科目群の伝統を受け継いだ教育を指す言葉．リベラルアーツとは、ギリシャ・ローマ時代からルネッサンスにかけて一般教養を目的とした自由七科（文法、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽）を指す。これらの科目は、リベラルという言葉が示すように、もともとは肉体労働から開放された自由人ふさわしい教養を意味し、実利性や職業性や専門性を指向する学問と対置されるものであった。
- しかしながら、自由七科の内容はしだいに膨らみ、たとえば修辞学は公文書の作成法から歴史や法律の知識までを含むようになった。やがて、修辞学の中の法律の知識は法学に移された。
- こうして、リベラル・アーツは、神学、法学、医学を学ぶための基礎的科目という色合いを帯びるようになった。しかしながら、言語を中核とした抽象的記号への習熟と論理的推理力の訓練に重きを置くことでは一貫していて、近代に至るまで西欧の知的エリートの教養のあり方を支配した。

一般教育：

- 第1次大戦以後、学問の専門細分化と実利追従への批判としてあらわれました。一般教育の理念は、上に述べたリベラル・アーツの伝統を継承しつつ、自然科学と社会科学をも含んだ、市民としての新たな教養ととらえることができる。
- 第2次世界大戦後、日本の教育改革がおこなわれ、それまでに改革されていたアメリカの高等教育にならって、大学の教育課程は一般教育と専門教育に分けられ、一般教育は教養部あるいはそれに該当する部局でおこなわれるようになった。

東京医科歯科大学教養部のHPより

教養教育・一般教育に関わる教員に求められること

- 「将来北海道医療を担う人材の育成」という大学の使命があるので、1学年の教育でモチベーションが失われることがあってはならない。

- 「専門へのつなぎ（基礎）となる教育」と「医療者としての人間性を培う教育」が必要。

- 6年間の医学教育の中で、一般・教養教育の量が専門教育を圧迫するものであってはならない
  （2学年以降学習（覚え）なければならない量が非常に多い）
  （どのくらいの一般・教養教育が必要かというエビデンスは無い）

- 専門科目担当教員との情報交換も必要

教養教育・一般教育に対する学生の要望等

- なぜ1学年で教養・一般教育が必要なのか、詳しく提示してほしい（最初にはっきりと認識させる必要がある）

  ⇒5月になってやる気がなくなってくる学生が多いようだ（俗に「札幌医大病」と呼ばれているらしい）

- 必ずしも医学の内容が入っていなくても良い。

- 学生は、高等教育・大人の学び（教育によって態度に変化が現れるもの）を知っている。